

令和7年度 広島平和記念式典 小中学生派遣事業 感想文



磐田市

《目次》

平和のバトン	磐田第一中学校 柴田 紗友華…	1
「アオギリ」が教えてくれたこと	城山中学校 岩谷 穂香…	1
明日	向陽中学校 寺田 晃絆…	2
目で見たこと、肌で感じたこと	神明中学校 三浦 唯…	2
世界に平和を	南部中学校 藤ヶ谷 美怜…	3
つなぐ想い	福田中学校 立石 昞士…	3
私たちがこれから創る世界	竜洋中学校 鈴木 純葉…	4
心を寄せ合い、平和な未来へ	豊田中学校 東 琢真…	5
この出来事を繰り返さない	豊田南中学校 三角 美佳…	6
平和だからこそある日常	豊岡中学校 大西 真緒…	7
つないでいく平和のバトン	磐田東中学校 大草 千鶴…	7
平和の灯火に願いを込めて	磐田北小学校 濱洲 花梨…	8
原爆の怖さと平和の大切さについて	磐田中部小学校 西川 葉主瑠…	9
被爆者の話を聞いて	磐田西小学校 林 湮子…	9
平和への願い	磐田南小学校 尾関 香奈…	10
平和を考える	東部小学校 高林 勢…	11
世界を平和にするために	大藤小学校 増田 悠馬…	11
広島派遣に参加して	向笠小学校 鈴木 巴菜…	12
平和への第一歩	長野小学校 梅村 希望…	13
祈る平和からつくる平和へ	岩田小学校 小林 愛果…	13

祈りがひびく広島で私が感じたこと

平和の大切さ	田原小学校 一松 美月…	14
学んだ事実とこの思い	富士見小学校 鈴木 李彩…	15
あの日の広島	福田小学校 鈴木 大良…	15
広島に行つて感じ、思ったこと	豊浜小学校 伊藤 鳳翔…	16
平和と戦争	竜洋東小学校 小関 結奈…	17
広島を訪れて	竜洋西小学校 貴田 かお梨…	17
広島に行つて・学んで・伝える	竜洋北小学校 山下 凜子…	18
戦争のこわさ、平和の大切さ	豊田南小学校 武田 梨瑚…	19
ノーモアウオーズ	豊田北部小学校 小林 晴陽…	19
ヒロシマを伝える	青城小学校 鈴木 惺太…	20
語り継ぐ平和と思い	豊田東小学校 鈴木 結愛…	21
平和を願い	豊岡南小学校 仲川 咲茅子…	21
	豊岡北小学校 織田 桜子…	22

(凡 例)

- ・本書は令和七年度広島平和記念式典小中学生派遣事業の参加者の感想文をまとめたものです。
- ・誤字・脱字などを除き、原文のままで掲載しています

平和のバトン

磐田第一中学校 柴田 紗友華

八月六日。それは、日本にとつても、世界にとつても、とても大切な日です。私は、今回広島平和記念式典派遣事業に参加し、原爆資料館を見学したり、平和記念式典に参列したりしました。そこで、人々が掲げる平和の尊さを学びました。

私には、式典だけでなく、平和公園を見学する中で印象に残ったことがあります。それは、多様な国籍や年齢の人々がともに平和を学ぶ姿です。平和を志す人がこんなにいるんだ、と感動を覚えました。私もその輪の一員として、何かできることはないかと考えるきっかけになりました。

また、被爆者の話を聞き、資料館を見学することで、原爆の恐ろしさを五感で感じ取ることができました。一瞬の光で奪われた命と街。焼けて、溶けて、嘆いた人々のことを思うと、とても胸が苦しくなりました。ありのままの出来事を話してくださる被爆者の方に感謝するとともに、平和の大切さを実感しました。戦後八十年、被爆者の人口は十万人を切り、原爆を体験して語る人は少なくなりました。いつか、被爆者のいない世界が訪れます。だからこそ、学んだことを私達が伝えていかなければいけないと決意しました。

「祈る平和から創る平和へ」

これは、第一回全国こども平和サミットに参加して、心に残った言葉です。祈るだけ、願うだけでは平和は実現できません。平和についてよく学び、自分にできることをよく考え、

一人ひとりが行動することで、ようやく平和は実現できるのではないのでしょうか。私達の世代だけでなく、未来にもつながる平和になるのではないのでしょうか。

祈るだけでなく行動を起こし、平和を創ることは、唯一の被爆国に住む私達の使命です。私は、この凄惨な出来事を未来に伝え、平和のバトンを繋いでいきます。

「アオギリ」が教えてくれたこと

城山中学校 岩谷 穂香

「原爆投下後の広島ではアオギリは人々に生きる希望を与えました。」

これは、平和記念公園で私たちを案内してくれたボランティアの方から聞いた、私の心に強く残った言葉の一つです。このアオギリとは、爆心地から一・三キロメートル地点で被爆した樹木のことです。枯れ木同然だったにもかかわらず、その一年後に再び芽吹き、広島の人々に生きる希望を与えたそうです。私はその話を聞いて、「植物が人々に生きる希望を与えるとはどういうことだろう」と疑問に思いました。

しかし、実際に被爆された方のお話や、資料館、訪問先で当時の記録や証言に触れていく中で、少しずつその言葉の意味が分かってきました。

原爆投下後、「七十五年は草木も生えぬ」と言われた広島で、

たった一年後に芽吹いたアオギリ。その姿は、生きることさえも辛いような絶望の中で、人々に一筋の希望を与えたのでしょう。

今、私たちが目にする広島の良い町並みは、アオギリから得た希望を力に変え、復興へと進んだ先人たちの強さと努力によつて築かれたものです。だからこそ、原爆投下という過去の惨劇は、決して風化させてはいけないものだと感じました。

人も植物も豊かに共存していける世界を目指して。「祈る平和」から「創る平和」へ。その思いを胸に、未来の世代へと平和のバトンを繋いでいきたいです。

明日

向陽中学校 寺田 晃絆

「また明日」。何気なく友人と交わすこの一言を、今の世界で本当に言えるのでしょうか。私は核を無くし、世界中の誰もが、安心して明日を迎えられる世の中になってほしいと、広島での二日間を過ごして感じました。

私がこの二日間特に印象的だった場所が、広島平和記念資料館です。ここには、とても現実とは思えないような写真がいくつもありました。焼け爛れた人、血だらけで逃げ続ける人、死の斑点が付いた人。見ているだけで正気を失ってし

まいそんな写真でした。あの日、あの瞬間、多くの人から「明日」が奪われたのだと、実感しました。

それだけではありません。命からがら逃げ延びた人も、地獄に等しい現実は変わりませんでした。さよならも言えず家族を失った人、原爆症に苦しむ人、被爆を理由に差別を受ける人。ある被爆者は「毎日狂うような気持ちだった」と残しています。被爆には「明日」があるのかすら分かりません。およそ九万から十六万人が被爆から四か月以内に亡くなったと推定されていますが、被害を受けた人の数は計り知れません。

核が落とされると、多くの人から「明日」が奪われてしまう。しかし、今の世界には核が一万二千発以上も存在しています。この状況で「明日」が存在していると、安心して言えるのでしょうか。今も世界各地では戦争や紛争が絶えず、核が使われないと断言することはできません。

核がある限り、いつ多くの人から「明日」が奪われるかわかりません。それも、一瞬にして。不安の絶えない世界から、安心して「明日」を迎えられる世界へと変えるためには、核を無くす必要があります。核の無い世界で、私は「また明日」と言いたいと、広島での二日間を過ごして強く感じました。

目で見たこと、肌で感じたこと

神明中学校 三浦 唯

私は広島に行き、戦争の悲惨さを目で見て、「平和」について深く考えることができました。私が特に印象に残ったことは二つあります。

一つ目は、梶矢さんの被爆体験のお話です。原爆によって、小学三年生のお姉さんが亡くなり、辛い思いをしてきたことが伝わってきました。話の中で、十年経っても仏壇の隣で泣く、お母さんの話がありました。疎開していたお姉さんに着替えを届けに行くと、お姉さんは、「死んでもいいから、お母さんと一緒にいい。」と言ったそうです。疎開先にいるように、お母さんは別れを告げ、バスに乗りましたが、お姉さんがバスを追いかけ走ってきたと話していました。どうしてもお姉さんを残して帰ることができず、広島に帰ったところ、被爆し、お姉さんは亡くなりました。この話を聴いて、お母さんは、お姉さんを広島に帰らせたことに、責任を感じて苦しんでいたことがわかりました。人の未来と大切な人を奪う戦争は恐ろしいと思いました。

二つ目は、横たわり、死を待つ人の写真です。戦時中は、医薬品と人手が不足し、十分な治療を受けることができませんでした。目を見てみると、光がなく、生きることが諦めているように見えました。もし、自分や自分の家族が、死を待つ状態になってしまったらと考えると、胸が締め付けられました。

今回、広島に行つて目で見たこと、肌で感じたことは、衝撃的なものでした。原爆によって、尊い命が一瞬で奪われた、一九四五年八月六日のことは必ず、多くの人に伝えようと思います。そして、今、私たちにできることは何かをよく考え、「平和」な世界を目指していきたいです。

世界に平和を

南部中学校 藤ヶ谷 美怜

「いのる平和からつくる平和へ」平和サミットで聞いたこの言葉が印象に残り続けています。

八十年前の八月六日。一発の原子爆弾が人々の笑顔や幸せを一瞬にして奪いました。原爆投下後の広島では七十五年間は草木も生えないだろうと言われていましたが、実際植物は力強く再生し、人々に希望を与え路面電車も三日で復旧。そして私が今回見た広島には、たくさんの人々が行き交い、多くのビルや家が立ち並ぶなど八十年前の惨状を思い浮かべせないほどの活気に満ち溢れていました。このことから当時の方々の平和への再建の思いと努力が強く伝わってきました。そして今年初めて被爆者が十万人を下回り、被爆の実相を語り継ぐことのできる人々が年々減少しており、いつかは被爆者のいない世界が訪れます。私たちは戦争を経験していないため、あの日の出来事や核兵器の恐ろしさの全てを理解する

のは難しいです。しかし無言の生き証人である被爆桜や原爆ドームの訴え、戦争体験者から学んだ事実をもとに自分の周りに伝えることはできます。平和を願う気持ちに加えてこれからは行動に移すことも意識し、唯一の被爆国としての使命を果たしていきます。

今回の広島派遣で平和資料館の訪問や式典の参加など、今までは写真や動画でしか見てこなかったものを目と耳、肌で感じたことで戦時下を生きた人々の思いや平和の大切さの理解をさらに深めることができました。

今もなお、世界では紛争が絶えず、この問題は簡単に解決できるものではありませんが、相手の考えを尊重し理解しようと努めること。そして世界中の人々が当たり前の日常への感謝と喜びを感じることができれば平和な社会に一步でも近づくのではないのでしょうか。一日でも早く世界に平和が訪れることを願います。

つなぐ想い

福田中学校 立石 眺士

「生きていること、今朝も目が覚めたことに感謝、喜びを感じていた。」

僕は、広島平和記念式典小中学生派遣事業に参加する一人として、八月五日、六日に広島へ行った。冒頭の言葉は、そ

の活動中に僕たちに当時の戦争について話してくれた梶矢文昭さんの言葉だ。梶矢さんは被爆当時、まだ幼い国民学校一年生だった。この言葉を聞いたとき僕は鳥肌が立った。

当時、広島に住んでいた梶矢さんは、夜寝ているときも空襲警報が鳴り響き、防空壕の中でびくびくしながら過ごし、お腹が減ったら、道端に生えている草花を食べ、空腹を耐えていたそうだ。広島に住んでいた人々は、いつ死ぬかわからない中で毎日を一生懸命に生きていた。

僕はふと思った。今までの僕はどうかだっただろうか。朝、目が覚めること、自分に明日が来ることを当たり前のことだと思っていなかっただろうか。毎日、自分の思うように体を動かせて、ご飯をいっぱい食べられて、夜はぐっすり眠ることができる。これは決して当たり前じゃない。友達や家族、そして自分が健康で幸せに暮らせるのは、戦時中の人々にとって考えられないものだった。僕は、一日一日を大切にそして、ありがたみを持って生きていくとその時誓いました。

広島での原爆投下から八〇年がたった今でも、戦争や核兵器はなくならない。僕はこれから、この活動で知った戦争の恐ろしさ、平和の尊さ、そして梶矢さんのように、戦争によって苦しい思いをした人たちの想いを、様々な人に伝えていきたい。いつか、戦争がなくなること、世界中の人々が安心して幸せに暮らしていくことができる世の中にするために、僕は梶矢さんの想いをつないでいく。そして、何度だって言う。「この世に、戦争、核兵器は必要ない」と。

私たちがこれから創る世界

竜洋中学校 鈴木 純葉

八月五日、六日の二日間の広島への旅は平和という言葉の意味を考えたり、戦争の恐ろしさを学んだりする、大変貴重な体験でした。携わっていたいた方々に感謝申し上げます。

今回の広島平和記念式典小中学生派遣事業に参加させていただきましたが、最初は正直言って軽い気持ちで参加していました。以前から戦争のことについて興味があり、今回の派遣事業で学ぶことができるというワクワクする気持ちが大きくなりました。ですが、そんな軽い気持ちでお話を聞いてはいけない、とガイドさんのお話を聞いて思いました。原爆や空襲などの被害を聞いて、自分がその時代に生きていても何もしなかったと思います、悔しく、もどかしくなりました。

なぜ人間は二度に渡って大きな戦争をしなければならなかったのか。原爆という恐ろしい兵器を作らなければならなかったのか。不思議で仕方がなかったです。日本が直接戦うことはありませんでしたが、第一次世界大戦で沢山の方々が亡くなり、もう一度と戦争は起こさないと、国際連盟まで作り、世界全体で戦争はしないと誓ったのに、起こってしまった悲劇。ガイドさんがおっしゃっていたことがありました。原爆というものには存在してはいけないもの。人間が自分勝手に作った、殺戮兵器だと。私もそう思います。人が手を出してはいけなかったものです。

昔、日本が原爆の被害に遭い、今でもその傷跡が残っているのに、世界ではまだまだたくさんの原子爆弾が存在しています。戦争など愚かなことです。戦争や紛争を今でも続けている国はたくさんあります。悲しいことだと思います。ですが、戦争を経験した方々が今の私たちに伝え、「戦争はこんなに恐ろしい」「原子爆弾は存在してはいけないものだ」と力強く伝えていく姿は美しいです。家族や友達を失い、自分の命までも失いそうになり、思い出したくない出来事を私たちに一つ一つ伝えてくれます。そんな姿を見て私たちは世界を変えていかなければならないと思いました。地球に比べたら、儚い人間は、ただでさえ寿命が短いのに、兵器によって天寿を全うすることができなかった人がたくさんいます。

世界を平和にするといっても戦争をなくすということだけではありません。いじめをなくす、防災をする、などということも平和につながります。そんなありきたりで、身近なことです。もちろん私たちの周りも例外ではありません。私はそんな人たちが笑顔で過ごし、平和だね、と笑い合える世界にしたいです。

「祈る平和から、創る平和へ」

私たち、次世代の人が平和を創っていききたいと思います。

心を寄せ合い、平和な未来へ

豊田中学校 東 琢真

「人と人で心を寄せ合えば、平和は守られるかもしれない。それは、若者が考えていかなければならないことです。」これは、平和記念公園でボランティアの岡本さんがおっしゃっていた言葉です。今回、僕は広島で多くのことを学べた中で、この言葉が強く心に残りました。

僕は、まず原爆ドームに向かいました。頑丈なはずの鉄筋やコンクリートの柱が垂れ下がる姿は原爆の威力を物語っていました。広島平和記念資料館では、八十年前の広島でどれだけ悲惨な出来事が起き、どれだけ苦しんだ人がいるのかわかることができました。特に、被爆直後の人々が苦しみながらさまざまな姿が描かれた絵は衝撃的でした。

二日目には広島平和記念式典に参加し、多くの人の平和に対する決意を感じました。その中でも、広島県知事が核抑止よりも、核兵器廃絶を強く訴え、「諦めるな。押し続ける。進み続ける。光が見えるだろう。そこに向かって這っていけ。」と言っていて、覚悟のようなものを感じました。

今回の派遣事業で、平和記念式典のこども代表の言葉にあった、「今もどこかで戦争が起きていることを自分事として捉え、平和について関心をもつこと」を重要と感じました。さらに、今回参加した第一回全国こども平和サミットで、自分たちと同じ小中学生も各地で平和に関する活動を行っているのを見て、まず自分たちができることは体験したことを伝え

ること、そして、安田女子中学高等学校からいただき、今も咲き続けている豊田中学校の被爆桜を通して、関心を持ってもらえる活動をしたいです。

人と人が心を寄せ合うのは簡単なことではないかもしれませんが。でも、平和について考えることはできます。そのために、今回の経験を活かしていきたいです。

この出来事を繰り返さない

豊田南中学校 三角 美佳

私は、八月五日と六日に行き、原子爆弾や平和について学びました。

一日目に訪れたのは、安田女子高等学校と原爆資料館です。そこで被爆者の遺品を見て、話を聞いて、感じたことは、とても悲惨で目を背けたくなるような、辛いものが多くありました。ですが、再び花を咲かせた被爆桜について学び、鳥肌が立つとともに、感動もしました。

二日目には、広島平和記念式典に参加しました。そこで、特に印象に残っているのは、広島市の小学生二人による、平和への誓いです。

「たとえ一つの声でも、学んだ事実を思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。」という言葉に、とても勇気をもらいました。

そして私は、今回の経験を通して伝えたいことがあります。それは、自分から戦争について学ぶべきだということです。私もそうでしたが、戦争を経験したことのない人たちは、戦争というものは昔の出来事である、という認識があり、身近ではないと思います。だからこそ、自ら学んで戦争や原爆の恐ろしさを知り、戦争はしてはいけないものだという認識をもつてほしいのです。

私たちが、戦争について知ること、平和に近づくのではないのでしょうか。

平和だからこそある日常

豊岡中学校 大西 真緒

一九四五年八月六日、人類史上初めて原子爆弾、通称「原爆」が広島に投下された。それは、ものすごい威力の爆弾で、九日には長崎にも同様のものが落とされ、街は一瞬にして焼け野原となってしまった。

今回、私は学校、市の代表として広島平和記念式典小中学生派遣団の一員となり、実際に広島で足を運び、戦争や原爆について学び、平和について深く考えてきた。そこで訪れた広島平和記念資料館には、数々の被爆資料や遺品などが展示されていた。中でも印象的だったのは、原爆が広島に落とされた時刻である八時十五分きっかりで止まった時計だ。

その瞬間に人々のそれまでの日常が消え去ったことを強く実感させられたからだ。

また、全国こども平和サミットでは実際に被爆された方から、被爆体験や平和への想いを直接うかがうというとても貴重な経験もさせていただいた。それまでに見た痛々しい写真でも恐怖を覚えるのには十分だったけれど、どこか別の世界のこのような、まだ自分とは切り離して考えていたのかも知らない。しかし、彼の言葉一つ一つの重みから、すべて八十年前にこの地で本当に起こった出来事なんだと肌で感じると同時に、自分がどれほど浅はかだったかに気づかされた。

私はこの二日間を通して、戦争の悲惨さや平和の尊さを、自分の心で感じる事ができた。今、私たちがこうして毎日を当たり前のように過ごしていることのありがたさを、戦争や原爆を知る人が少なくなっている今だからこそ、深く心に留めて生きていきたいと思う。世界で唯一の被爆国に生きる私たちには、過去に何があったかを知り、それを語り継ぎ、二度と同じ悲劇をくり返さないようにする責任があるのではないだろうか。平和な世の中を築くために、小さなことでも一歩ずつ積み重ねていくことを大切にしていきたい。

つないでいく平和のバトン

磐田東中学校 大草 千鶴

私は広島派遣事業に参加して、印象に残ったことが大きく

分けて2つあります。

一つ目は、広島平和記念資料館の見学です。展示がどれも当時の惨状を表していて、今も思い出すだけでつらく感じます。その中でも特に、折り鶴が強く印象に残っています。館の包み紙や薬包紙で一生懸命折られた鶴を見たら、生きたいという強い気持ちひしひしと伝わってきました。

また、展示を見ていると、さまざまな国籍の人々がいました。世界中から平和について学び、繋げていくため、多くの人に来ていという事実に驚くとともに、世界唯一の被爆国である日本の背負っているとても大きなものに気づくことができました。

二つ目は広島市の平和記念式典の平和への誓いです。私は平和への誓いの中で、印象に残った言葉があります。「大人だけでなく子どもである私たちも平和のために行動することができします。」私たちも、平和のために、声を上げることができします。行動を起こすことができます。このことを、この言葉は私に教えてくれました。これから、私も、平和についてより深く考え、その考えを発信していきたいです。

この他にも、被爆者の方の体験談や詩の朗読など色々な貴重なお話を聴くことができました。どの体験も、教科書や資料集などでは体験できないような臨場感や緊張感、緊迫感がありました。今はもう、当時の被爆者の人数も減ってきています。なので、今回の体験はとても貴重なものでした。今回の経験を大切にして、これから生きていきたいです。

平和の灯火に願いを込めて

磐田北小学校 濱洲 花梨

あなたは命の次に大切な人はいいますか？あなたはその問いかけにどう答えますか。「原子爆弾」という爆弾のせいでたくさん尊い命が一瞬で消えてしまいました。先日、広島を訪れ平和について考える機会がありました。この特別な体験を通じて、戦争の悲惨さや平和の重要性を一層深く考えることが出来ました。

私達は被爆者の梶矢さんのお話を聞きました。梶矢さんが小学一年生の時二歳上のお姉さんを原爆で亡くされました。梶矢さんはそのことを後悔しているそうです。大切な人が一瞬で消えてしまったそんな悲しい出来事を私達に語り続けてくれる梶矢さんの気持ちに心が痛みました。そして平和記念資料館を訪れて歴史的事実に触れ、展示物一つ一つに込められたメッセージを読み進めるうちに、平和を維持するための責任の重さを感じました。私たちが現在ある平和は過去の多くの犠牲の上にあることを深く認識しました。平和式典では様々な国の方々が集まり、原爆の犠牲者に対する追悼の意を表していました。その場に立ち、自らの心を静め、式典の厳粛な雰囲気にも包まれることにより、平和の大切さを心から感じる事ができました。特に被爆者の方々のお話を聞くことができ、彼らが抱える痛みと苦しみに触れ、改めて戦争の恐ろしさを知りました。彼らの生き様は、私達にとっての教訓であり、その経験を忘れてはならないことを実感しました。

「祈る平和ではなく、創る平和」を日本だけではなく世界の目標として、核兵器の存在しない・戦争を二度と行わないと断言できるそんな世界にするために私達は今何ができるのか考え続け、その思いを繋げる事が平和に繋がると私は思います。そして、みんな一人一人が寄り添って命の尊さについて少しでも考えて欲しいです。いつか平和の灯火の火を消せる日が来るように。

原爆の怖さと平和の大切さについて

磐田中部小学校 西川 葉主瑠

僕は、学校と市民の代表として、原爆と平和について学ぶために広島に行きました。まず最初に安田女子中学高等学校に行き、被爆樹木の中の被爆桜を見せてもらいました。見た感想は、被爆したにもかかわらず、どっしりとした幹で、きれいな緑色の葉がついており、立派でとても感動しました。そして被爆したのに今も花を咲かせている生命力に驚きました。その後、平和記念公園に行き、まず目に入ってきたのは原爆ドームです。鉄骨の部分以外は全壊で、壁はボロボロになっており、色が変色している部分も見えました。このことから原爆の破壊力に圧倒され、恐ろしさに声も出ませんでした。そのあと、原爆資料館に行きました。館内に入ると被爆者の服や道具などが展示されており、血がついているものや、

黒くなっているものもあり、とても怖く、被爆者やその家族の気持ちを考えるととても悲しくなりました。被爆者が描いた絵では、被爆当時の広島の様子が鮮明に描かれており被爆者のつらい体験や、火傷などを負った苦しみや痛みを想像できました。原爆資料館を訪れて、原爆がもたらした被害がよく分かりました。そしてこのようなことが二度と起こらない平和の大切さを実感しました。次の日、平和記念式典に参加しました。広島の人達の平和への誓い、思いが心に響きました。その後平和サミットに出席し、被爆者の話を実際に聞きました。被爆者の話では、熱線により大火傷をした人がゾロゾロと列をつくって逃げて行ったそうです。柱の下敷きになったり、ガラスが刺さったりした人も大勢いたと言っていました。この被爆者の話を聞いて、とても痛そうで、怖かったのもう二度と原爆が落とされない世界になってほしいと思いました。

この活動を通して、学んだことを学校のみんなや、戦争を知らない人達に伝えたいです。

被爆者の話を聞いて

磐田西小学校 林 湊子

私が一番心に残っていることは、梶矢文昭さんが小学生だった時に原子爆弾を落とされてしまった時の話です。その時

の出来事を資料や絵をもとに、話してくれました。その話の中には

「原子爆弾が落とされた時はまさに地獄のようだった。そして人を人だと判断できないくらい全身大火傷し皮膚がどろどろになったり、体中にガラスが突きささったりしていた。そんな光景を見てもう何も考えられなくなっていた。」

次に、戦争と平和の違いについて話してくれました。

「戦争時代は食べる物もあまりなく、安心して寝られなかった。でも今は自分のやりたいことが出来て自由に生きられることができる。その当たり前の生活こそが平和だと思う。でも戦争時代は、その当たり前の生活がなかった。」

私はその話を聞いて、戦争をするのはとてもよくないことだと改めて思いました。もう二度とそのような地獄の体験を誰にもしてほしくないと深く願いました。

私はその話を聞き、資料館にある資料やボロボロになった三輪車を見ました。そして、落とされる前は自然豊かな街だったのに原子爆弾を落とされたことで、自然が真っ黒になってしまった映像も見ました。無差別に尊い命と自然を一瞬にして奪った映像を。

私が一番許せないのは、そこに住んでいる人達は原子爆弾の実験台として利用された事です。もう二度と原子爆弾を落としてもいけないし、戦争をしていい理由なんて絶対ないと深く感じました。

平和への願い

磐田南小学校 尾関 香奈

私は、この広島平和記念式典の派遣事業で多くのことを知りました。資料館や式典に出ることはとても緊張しましたが、派遣事業に参加してよかったと思っています。

私の印象に残っていること一つ目は、平和記念公園です。記念公園の案内ボランティアの方から聞いたお話の中に、野村英三さんという方のお話がありました。野村さんは、爆心地から約百七十メートルの燃料会館の地下室で被爆されたそうです。かろうじて逃げることできたそうですが、その後原爆症が発症したのだと聞きました。野村さんは、このことを伝えていかなければと思い、生きてきたそうです。私はこのお話を聞き、想像より原爆は恐ろしいもののだと思えました。案内ボランティアさんのお話を聞き、「原爆をなくしたい」という思いが強くなりました。

二つ目は、被爆桜です。安田女子中学高等学校では、住友林業さんと協力して被爆桜のクローンをつくって全国に配れるように、頑張っているそうです。今は、次の被爆桜のクローンをつくるためのために別の桜で練習していると聞きました。被爆桜は八十年経っても変わらずに人々に元気を与え続けています。磐田南小学校にも被爆桜の接ぎ木があるそうなので、探してみようと思います。

この派遣事業では、改めて平和について考えるいい機会になりました。誰もが、笑って幸せだと思える世界になるよう

に、自分にできることを精一杯頑張ろうと思います。これから悲しむ人が少しでも少なくなるように一人でもいいから「戦争なんていらない」と思う人が増えるように、心から願います。このような貴重な体験ができる機会をくださりありがとうございました。

平和を考える

東部小学校 高林 勢

今年も夏は暑く、静岡県では四十度を観測しました。原子爆弾が落とされた時の地表温度は三千度から四千度。被爆された方が受けた三千度の熱さは、想像もできない熱さだっただろうと思います。

ぼくは広島派遣事業に参加し、考え方、意識が変わった点が二つあります。

一つ目は、「平和」についてです。ぼくはこれまで、平和とは「戦争が起きない事」だと思っていました。でも、国際連合の方が「だれもが差別なく安定して暮らせる事」と話しているのを聞き、戦争が起きない事だけでなく、この地球に生きる全ての人や生き物が、平等にその生き方を認めあえる世界こそ、もう一步進んだ「平和」なのだと知りました。

二つ目は、「戦争の始まり」についてです。それについて調べ、その当時を想像し考えました。領土がほしい、特産物を

自分達の国の物にしたいなど、争いの原因となる意見や欲望はこの世にたくさんあります。その中でも、相手の欲と自分の欲を認め合う事。自分とはちがう考え方があるという事。それを尊重し合って、少しずつゆずり合い話し合っていたら、小さなけんかのうちに仲直りできていたら、原爆は落ちなかったかもしれないと、ぼくは強く思いました。

ぼく達は、幸せな世界に生きています。あの時、原爆で倒れた人々が、必死に平和を求め、平和を祈り、作り上げてくれた世界でぼく達は生きています。「ただいま」と帰る家があり、爆弾の心配もなく明日を想像して眠る。友達とけんかしたり「宿題をしなさい」と親に怒られたりすることが、どれだけ幸せなことか。ぼく達が当たり前だと思っている日常に平和があふれています。戦争をわすれず、この平和を守り、語り、引き継いでいく事が、平和な時代を生きるぼく達の使命です。

世界を平和にするために

大藤小学校 増田 悠馬

ぼくが平和記念式典や資料館などで感じたことや伝えたいことは四つあります。

一つ目は、被爆桜です。被爆桜とは爆心地から半径二キロメートル以内で被爆した桜のことです。今は安田女子中学高

等学校にあり、そこから日本全国に被爆桜の苗木を配っています。ソメイヨシノの寿命は六十年から八十年といわれていますが、九十年近く生きる桜から生きる希望をもらいました。

二つ目は、資料館の三輪車です。この三輪車の持ち主は三才と十一ヶ月の鍔谷伸一くんでした。伸一くんは三輪車に乗るのが大好きで八月六日の朝もいつもと同じように三輪車に乗って遊んでいました。そこに原爆が落ち全身に大けが、やけどを負い、その夜なくなりました。ぼくは伸一くんの気持ちを考えるたびに胸が痛くなり、三輪車を見てられなくなりました。原爆は二度と使ってはだめだと思いました。

三つ目は、子ども代表の言葉です。心に残ったのは、「私たち子どもにもできることはあります。」と「願うだけでは平和はおとずれない。」です。ぼくはたしかに行動しないと平和はおとずれないし、ぼくたち子どものするべきことは何かということを深く考えさせられました。

四つ目は、被爆者の話です。話してくれたのは梶矢文昭さん八十六才で、爆心地から約一・八キロの地点で被爆しました。本だけでは伝わらない被爆者の気持ちや声から伝わってきました。太陽の中にいるような暑さと、すごく強い爆風をたえぬいたのがすごいと思いました。

今、世界には一万二千発も核兵器があります。一発でも核兵器を使わせないために、一人一人が核兵器のことを知り、それを伝えていく必要があります。ぼくたちが少しでも伝えれば世界は少し平和に近づくと 생각합니다。

広島派遣に参加して

向笠小学校 鈴木 巴菜

今年で戦後八〇年をむかえました。私が戦争について考えるきっかけとなったのは、国語の「たずねびと」です。大勢の人の命と未来を一しゅんでうばってしまった原子爆弾と戦争についてもっと詳しく知りたいと思うようになりました。

今回の広島平和記念式典へ参加することで、私は原子爆弾が落とされた広島を知ることと、戦争は良くないことだとかかっているのに、どうして今も世界では争いが起きているのかについてもっと考えてみたいと思いました。

原爆資料館には、すごい暑さでぐにやぐにやになった弁当箱、そこにいた人の影だけが残っているかべなどが展示されていて、大勢の人の苦しみを簡単に想像できました。運よく生き残った人たちも、爆弾によって病気になる、苦しい生き方をされてきたことも分かりました。戦争が終わって八〇年たっても忘れることのない苦しみと一緒に生きている人がたくさんいることを知りました。

全国子供平和サミットでは、被爆体験者の方の話を聞いたり、原爆に関わる詩を読んだりしました。家族と一緒に過ごしているのは、当たり前ではなく、すごく幸せなことなんだと感じました。

「たとえ一つの声でも思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。大人だけでなく、子供である私たちも平和のために行動することができます。」

これは平和記念式典での子供代表の言葉です。広島の人たちは、悲しみやにくしみの気持ちだけでなく、どうしたら平和で仲良く暮らしていけるか平和を願い前向きな気持ちでいることがすごいと思いました。

戦争を知らない私たちが、これからも平和な時代を続けていくためには、戦争のひさんさを知り、平和のありがたさを伝えていくことが大切な使命だと感じました。

平和への第一歩

長野小学校 梅村 希望

本当にこの場所で、原子爆弾が落とされたのだろうか。と疑問に思うほど、広島は立派な建物が多く、行き交う人々は笑顔で、街全体がキラキラしていました。ですが、実際に原爆ドームを間近で感じたり、平和記念資料館で展示を見たりすると、やはり八〇年前には原子爆弾が落とされ、とても悲さんな思いをした場所だったということを実感しました。

今までの私は、「日本は平和」と当たり前のように思っていました。もしかすると『平和』について深く考えたことはなかったかもしれない。しかし、広島平和学習を終えた今、『平和』がいかに大切なもので、未来に引き継いでいかなければならないと強く感じています。そして、もう一つ分かったことがあります。それは、私は戦争のことについて一ミリ

も分かっていなかったということです。戦争を体験していないことは良いことだけど、戦争を実際に体験した人にしか、どんなに苦しかったのか、悲しかったのか、悔しかったのかなんて分かりません。でも、分からなくても、戦争がもたらす悲惨さを知り、世界を平和にするためにどのようなことができるのか考えることはできます。今の日本は平和だからこそ、戦争について知る、戦争が起すマイナスなことを考える、実際に戦争で苦しんだ人の声を聴く…ということが大切です。

今年は、原子爆弾が投下されてから八〇年、そして、戦後八〇年たちます。いまだにいけない苦しみや悲しみを抱えている人がいます。もう、こんな思いを二度とさせないために、そして、大切な人を戦争で失わないようにするために、私は戦争のことについて学び、そのことから平和について深く考え、多くの人に平和の大切さを伝えていきたいです。

広島平和学習は、これからの未来と平和について考える貴重な体験でした。ありがとうございました。

祈る平和からつくる平和へ

岩田小学校 小林 愛果

私は広島に行って、戦争による辛い日々、原爆くのおそろしき、平和にするためのことについて学びました。

今、私たちは毎日を安心して過ごしているけど、戦争があったところは夜に安心してねむれなかったそうです。夜、ねている時に空しゅう警報がなったりして親におこされ、ひなんをしたりするからです。また、朝になり自分が生きていることで喜んでいたそうです。私たちは朝起きて、生きていることが当たり前かもしれませんが、戦争のころは夜の間に死ぬ可能性があったため生きていることだけでも喜びだったのです。

しかしそんな中、八月六日八時十五分、広島に人類初の原子ばくだん、「リトル・ボーイ」が投下し、大勢の人々が死にました。地表温度は三千から四千度だったそうです。そのため皮ふが垂れ下がった人もいたそうです。そしてその人達は「水をくれー」とうめいていたりしたそうです。原子ばくだん投下後空から黒い雨が降ってきました。人々は水がほしかったから喜んでその雨を飲んだそうです。しかし、その黒い雨には灰や放射線がふくまれていました。私は最初、黒い雨が降ってよかったなと思いましたが、灰や放射線がふくまれていることを知り人々はそれを知らずに飲んでいたことがとてもショックでした。

そして、全国こども平和サミットではある言葉を胸に刻んでいます。それは「祈る平和からつくる平和へ」です。私はこの言葉に共感しました。

平和をつくるには、被ばく者の話を聞いたり戦争の話を聞いて語りつぐことが大切だと思います。

祈りがひびく広島で私が感じたこと

田原小学校 一松 美月

私は、八月五日と六日に広島へ行きました。

最初の場所は、安田女子高等学校でした。そこには、ソメイヨシノという種類の桜があり、それを被爆桜といいます。被爆地の近くにあったにもかかわらず八十年間ずっと残っていました。そう聞いて私は、すぐおどろかされました。けれどソメイヨシノの寿命は、六十年から八十年と言われている。それを知った生徒たちは、被爆桜が灯してくれた希望の光をつなぐと、苗木を作って全国に送り届ける活動をはじめたそうです。この活動をしようと思った生徒の人達をとでもすてきだなと思いました。次に平和記念公園で聞いた話では、原爆が落とされた直後、公園付近の温度は三千度から四千度で、しばらくたったときに黒い雨が降り、それには、放射線がふくまれていました。きっと誰も想像ができないようになつらさだったと思います。公園内にある原爆資料館には、実際の写真や、絵が展示されていて、私にとって資料館が一番原爆のこわさが分かったところでした。二日目にあった広島平和記念式典では、磐田市以外からたくさんの小中学生がいて、原爆が落とされたことは、日本にとってとても大きな出来事だったんだとあらためて思いました。最後に行った全国こども平和サミットでは、実際に被爆した人が、原爆が落ちたあのかきながらおこったのかをくわしく話してくれました。ここで聞いた「祈る平和からつくる平和

へ」という言葉が私は、広島に行つて、一番心に残っています。

私は、二日間広島で学び、実際に行かないと分からないことなどを見たり聞いたりして知れてよかつたし、たくさんの人々の想いを理解したことで前より平和への意識が高まりました。

平和の大切さ

富士見小学校 鈴木 李彩

私は今回の広島派遣団に参加させてもらう前まで戦争、原爆、平和についてあまり深く考えた事はありませんでした。授業や本などで学ぶ事はありませんでしたが、どこか遠い昔の話のように感じていました。今回、派遣団になって、今を生きる自分達が考えなくてはならない大切な課題だと思っています。私は平和記念式典と第一回全国こども平和サミットが心に残りました。

平和記念式典では、百二十の国や地域の大使たちが参加しました。子供代表の『平和への誓い』の中の「周りの人たちのためにほんの少し行動をすることがいづれ世界の平和につながるのではないだろうか。」という言葉が心に残りました。平和な世界は当たり前ではありません。一人一人が行動をすること、未来の平和を築いていかなければならないと思います。

ます。

第一回全国こども平和サミットでは当時、小学一年生の被爆者にお話を聞くことができました。小学校で掃除中に被爆をして、お姉さんを亡くされました。「ピカッ」という音の後にきのこ雲が上がり、たくさんの人が熱線を浴び大火傷をし、こつぱみじんにガラスが飛んで来て、体にガラスが刺さったり、被爆の惨状を話してくれました。世界各国から核兵器は減らず、ずっと増え続けている。けれど、「絶対に使わせてはいけないし、三度目は許されない。起こしてはいけない。」とおっしゃっていました。お話を聞いて胸がとても痛くなりました。私も広島で起きた出来事が二度と繰り返されてはいけないと心から思いました。被爆体験を話してくれる方が少なくなっていく中、今回自分が見て聞いて感じた事を、周りの人たちに伝えていきたいです。

今も世界で戦争が行われていますが、世界中の人に核兵器の悲惨さを分かってほしいし、それを伝えていきたいです。

学んだ事実とこの思い

福田小学校 鈴木 大良

ぼくは、原爆や戦争についてよく知りませんでした。でも戦争は絶対にしてはいけないことだと思います。アンパンマンの作者やなせたかしさんの「正義の戦争なんてないんだ。」

という考えに納得しました。だからこそ戦争を知りたいと思うようになりました。知った自分が何を感じるのか、それについて知りたいと思ったことが、広島派遣に参加したいと思ったきっかけです。

特に心に残ったのは、原爆資料館です。原爆の被害や後い症、人々の苦しみを知りました。原爆によってケロイドという皮膚が盛り上がる病気になった人の皮膚までありました。正直、気持ちが悪く思っていました。けが人や死体がすし詰めになっている写真も見ました。それらを見て、人はこんなおぼけのようになってしまふのかと驚き、心が痛くなりました。生き残れても原爆症で苦しめられたり、お腹の赤ちゃんにまで影響が出たり、どれだけ苦しめられればいいのか。言葉にできない憎しみがわいてきました。

原爆ドームでは、むき出しになった鉄骨に原爆のすさまじい威力やおそろしさを感じました。原爆の子の像にあつたたくさんの折り鶴から、みんなの平和を願う気持ちを感じました。

二日間を通して、戦争や原爆について知った今、争いは絶対にはいけないことだと改めて実感しました。人々の人生を奪った原爆や戦争をとて憎く思います。

「学んだ事実を思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。子どもである私たちも平和のために行動することができます。」という広島の小学生の平和への誓いに心を打たれました。ぼくは戦争のない平和な世界を生きたいです。学んだ事実に基づくこの思いを込めて伝えていきま

す。

あの日の広島

豊浜小学校 伊藤 鳳翔

僕は、広島に行つて安田女子高等学校の被爆桜や原爆ドームなど多くのものを見学し、八十年前の原爆が落とされた日のことを学びました。

僕は、平和記念公園のガイドさんの「人間と人間は友達になれる。人間と人間が心を寄りそばれば平和が実現できるかもしれない。」という言葉聞いて人間同士が心を寄りそばることが平和に繋がるのだと思いました。広島平和記念資料館では、被爆した時の様子や、被爆後の遺品などが展示されていて、中でも人の影がうつったレンガと死の斑点が出た兵士が記憶に強く残っています。原爆の威力の恐ろしさを改めて感じ、八十年前の悲惨な状況を知ることができました。第一回子供平和サミットでは、実際に被爆した方のお話を聞きました。僕はお話を聞いて、原爆の恐ろしさや被害の大きさ、飲む水もなく苦しい思いをしなくてはいけなかった状況を想像し、戦争というものがどれだけ恐ろしく、ひどいものであるかを感じました。被爆した方達の「地獄の真ん中にいる。」という表現を聞き、悲惨さをさらに感じました。また、平和サミットの発表の中の「祈る平和から創る平和へ。」という言葉が特

に心に残りました。

僕は広島派遣に参加し多くのことを学びました。そして今自分の周りにある平和な環境は当たり前ではなく、大切なものであるということも知りました。一人一人が行動に移すことが平和への一歩だと思っています。学んできたことを家族や友達などに伝えることから始めていきます。そして僕は、世界が平和になるように人と人との輪を大切にしたいです。友達や家族を大切に相手の気持ちを考えて行動し、困っている人がいたら手を差し伸べたり声を掛けられる人になりたいと思います。また、日本以外の国のことも知ろうとすることで世界の平和について考えたいと思います。

広島に行つて感じ、思ったこと

竜洋東小学校 小関 結奈

私が広島に行つて感じたこと見て思ったことは合せて、二つあります。

一つ目は、核兵器の悲惨さです。私は平和記念資料館や原爆ドームなどを訪問したり、被爆者の方のお話を聞かせて頂きました。平和記念資料館では、放射性物質を含んだ黒い雨の跡がついた壁やくにやりと溶けたガラス瓶、八時十五分で止まった時間などが展示されており、たった一つの原爆で一つの町が灰になるほどの被害があるということがとても怖く

感じました。また、被爆者の方のお話では、原爆が落されガラスの破片が体中に突き刺さり血だらけで幽霊のように歩いている方がたくさんいたと聞きとても悲しく痛ましい気持ちになりました。

二つ目は、平和の大切さや原爆の恐ろしさを伝えたいという気持ちを強く感じました。広島には、被爆建物や被爆樹木が多く残されていました。戦後八十年たった今でも残っているのは、昔の人々が「原爆や戦争が二度と起きてはいけない」と思い、私たちに戦争の怖さや平和の大切さを伝えるために残してくれたのだと感じました。そして残してくれた方々に感謝していかねばいけないと思いました。

最後に記念式典で広島の小中学生も言っていました。平和は大人だけでなく子供も考えていくべきだということに私も共感しました。そのためにもっと多くの人が戦争について知り人々の多様性を認めていくことがとても大切だと私は思います。私はこの広島での経験を活かして私自身で平和の大切さや戦争の恐ろしさを周りの人たちに伝えていこうと思います。

平和と戦争

竜洋西小学校 貴田 かお梨

私が、この事業に参加したかった理由は二つあります。一つ目は、私の周りに戦争を体験している人がいないので、

体験した人の話を聞きたかったからです。

二つ目は、平和資料館の写真や展示物をじっくり見たかったからです。

実際に被爆者の人に話を聞いて、原爆がどれだけおそろしい物なのか分かりました。当時、被害を受けた人や動物たちが、火からのがれるために、川の中いっぱいに入っていたそうです。私はその話を聞いて想像してみました。けがをした人たちが大きな列をつくり、川に入って行く姿はとてもおそろしく、とてもかわいそうに思いました。小さな子どもも、ただふつうにくらしていた人も、無差別にこうげきされて、罪のない人の命がたくさんうばわれました。私は、このことを決して忘れてはいけないことだと思いました。

平和記念資料館では、色々な、写真や展示物を見てきました。特に印象に残ったことは真つ黒にこげたお弁当箱と、被爆して曲ってしまったビンです。

真つ黒にこげてしまったお弁当箱は、中に何が入っていたのかも分からず、ただ黒くなったお米だけが残っていました。きつと、お昼に食べるはずだったのに、とつ然日常をうばわれてしまったということが伝わってきました。

今回の広島派遣事業を通して、平和というものは尊いものだと感じました。家族みんながいて、毎日ごはんを食べて、学校に行けることは、当たり前前の生活じゃないということ、大切に思っ過ぎていけたらいいなと思いました。

広島を訪れて

竜洋北小学校 山下 凜子

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に一発の原子爆弾が落とされました。たった一発の爆弾により、約十四万人の人が犠牲になりました。そして、八十年経った今も苦しんでいる人達が大勢いることを知りました。

初めて原爆ドームを間の当たりにした時、「すごい。」あまりのしよげきに言葉を失いました。一瞬にして、大きな建物の、窓も壁も屋根もすべて吹き飛ばされていました。そして、その建物は、今もなおそこに建ち続け、私達に戦争のおそろしさ、平和の大切さを伝え続けているんだと思いました。

平和記念資料館では、当時の状況を伝える展示物や写真を見たり、触ったりしました。死のはんてんが出てしまった兵士、全身に大やけどを負った人達、水を求めて亡くなってしまった人達の写真を見た時、あまりにもひさんで、悲しい事実を知り、私は写真に納めることが出来ませんでした。しかし、その事実はいつかりと自分の中に納め、知り得た事を多くの人に伝えていきたいと思いました。

平和記念式典で述べられたこども代表の平和への誓いの中に、「子供である私達も平和のために行動する事が出来ます。」とありました。私が今出来る事は、思いやりを持って行動する事だと考えました。相手の事を考え、自分のことを伝え、お互いに話し合う事が出来れば、平和につながるのではない

かと思っています。

終戦八十年の節目に第一回全国こども平和サミットが開催され、被爆者の方々による被爆体験を聞きました。体にも心にも傷を負った方々が辛い経験を思い出し、伝えてくださっています。しかし、被爆者の生の声を聞く事が出来るのも、あとわずかです。それを私達が受け取り、平和のバトンを次の人にわたしていかなければいけないと強く思いました。

今回、広島派遣団として広島を訪れて、戦争の悲惨さを知り、平和への関心が強くなりました。

私は、今後人がつくり出すものは、核兵器ではなく、小さな思いやりであってほしいと願います。

広島に行つて・学んで・伝える

豊田南小学校 武田 梨瑚

私は、広島平和記念式典小中学生派遣団として、被爆地、広島に向かいました。そこで、様々なものを学び、感じてきました。

私が特に心に残ったことは、広島原爆資料館です。資料館では、写真や絵、実際のものなどで、あの時何があったのかが展示されています。そして、原爆が投下されたことだけでなく、救護活動の姿や放射線による何十年も続いた苦しみなどが、赤裸々に語られていました。それらは、本当に目を覆

いたくなるような悲惨で、残酷なものばかりでした。「折れ曲がった鉄骨の針」や「死の斑点が出た兵士」など、実際のものや写真は、「本当にこの場所で、たった一発の爆弾で、こんなにもたくさんの方々の人生が壊れてしまったんだなあ」と、深く心に突き刺さりました。そして、私たちの当たり前や日常は、本当にかげがえのないものであり、命の尊さや人々の絆も心に深く染み渡りました。

私は、この貴重な体験を経て、「命を落とすことはおかしくない」と、なっている戦争は、この世界に絶対にあつてはならないことだと思いました。そして、この過去の過ちや命の尊さを家族や友だち…やがて、世界に伝え、繋げていかなければなりません。

戦争のこわさ、平和の大切さ

豊田北部小学校 小林 晴陽

私は、広島でこんな詩に出会いました。

「ちちをかえせ ははをかえせ としよりをかえせ こどもをかえせ わたしをかえせ わたしにつながるにんげんをかえせ にんげんのにんげんのよのあるかぎり くずれぬへいわを へいわをかえせ」

この詩は、峠三吉さんの「人間をかえせ」です。わたしはこの詩を読み、深く考えさせられました。「かえせ」という一言

にどれだけ辛いことがあったか、被爆した方たちの思いが伝わってきました。この詩で平和の考え方がわかりました。

私は広島で資料館が心に残りました。昭和二十年八月六日月曜日、午前八時十五分に広島でどれほど悲惨なことがあったのか、被爆者がどれほど辛かったかが分かり、「戦争」への思いや「平和」があたりまえではないことを軽く考えていたことが深く深く胸に刻まれました。学校で学んだことも大切だと思う。でも実際に原爆が落された場所に行くと、話を聞いたり、物を見ると、学んだことがさらに深まり、考え方が変わる。

この「平和」の大切さ、「戦争」のこわさを次の世代へつないでいくのは私たちだ。この現実をうけとめ、心の中にしまっておかず、つたえていきたいと思う。今、自分ができることは何かも考え、実行していきたいと思います。

ノーモアウオーズ

青城小学校 鈴木 惺太

あなたは、平和と聞いて何を思いうかべますか。みんなが仲良く生活できること、戦争がない世界でしょうか。だれもが平和に暮らしたいと思っているはずなのに、どうして戦争が起きてしまうのでしょうか。世界では、今も戦争が起きています。

ぼくは、戦後八十年という節目に広島を訪れたことで、平和ということの意味を身を持って感じるようになりました。

広島で原爆によって亡くなられた方は、昭和二十年十二月末までに、およそ十四万人にも達しました。これは、現在の磐田市の人口に近い人たちが亡くなられたことになります。原爆による爆風や熱線によって水を求めた人たちが、原爆ドーム近くの川におしよせました。その川は、遺体でいっぱいだったそうです。仮に被爆して生き残ったとしても、放射能のえいきょうで結こんでできなかったり、貧困や差別などに苦しんだり、自分だけが生き残って申し訳ないと思う人もいました。このような話を聴いてぼくは、戦争は、死んでも生きても必ず悲しく苦しくなる人があるんだなと思いました。

平和記念式典では、こども代表のこどもを聴きました。その中で「周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。」ということばが印象に残りました。また、こども平和サミットでの「祈る平和から創る平和へ」という思いを受けつぎ、ぼく自身も平和についてただ祈るのではなく、少しでもいいから行動に移していきたいと思います。

戦争が起きれば、悲しい苦しい気持ちを持つ人が必ずでてきます。もう二度と戦争を起こしてはいけません。そのためには、戦争の事実から目を背けずに、平和のために一人一人がどうすべきかを考え続けることが大切なのではないでしょうか。

ヒロシマを伝える

豊田東小学校 鈴木 結愛

広島を訪れて最も心に残ったのは、平和記念式典の子供代表の二人が言っていた、「たとえ一つの声でも、学んだ事実を思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずです。」という言葉です。この言葉はとても重く、心に深くひびきました。そして、二度とこんなことが起きてほしくないという私の思いが、以前より強くなりました。

平和記念公園の原爆ドームは、写真で見たものとは打って変わって、圧倒的な迫力と絶望感があり、改めて、原爆の恐ろしさを痛感しました。

「明日」が来ることは決して当たり前ではないということ、広島平和記念資料館に展示されていた「そこに人が座っていた跡がある石段」や「針が止まった時計」で学びました。だからこそ、今を大切に生きること、そして平和を守る努力を続けることが必要なのだと感じました。

安田女子中学高等学校を訪問させていただいた際には、被爆桜を見学させてもらい、その生命力の強さを感じました。この桜は、広島の人々が生きた証、希望の象徴として、静かに、そして力強く咲き続け、私たちに平和を訴えかけているように思います。

また、被爆桜の説明の中で、磐田市のかぶと塚公園にも被爆桜があることを教えていただきました。だから、磐田に戻ってからすぐにその桜を見に行きました。このことを、学校

の皆さんにも伝えていきたいと思います。

私は、平和とは、一人ひとりの良い行いの積み重ね、笑顔の積み重ねで生まれると信じています。そのためには、まずは自分にできることを少しずつでも、願っているだけではなく、行動に移していきたいと考えます。

語り継ぐ平和と思い

豊岡南小学校 仲川 咲茅子

私は、八〇年前に起こったことや、被爆者の思いが知りたくて、広島平和記念式典小中学生派遣事業に参加しました。

一日目に平和記念資料館に行きました。

被爆した三輪車、崩れた建物の絵など、その時の様子がよく分かるものが展示されていました。

その中で、一番心に残ったものは、被爆者の服です。大人の人の服から、小さい子の服までありました。原爆のせいで、軍人だけではなく、戦争に関係ない市民の中からも多くの犠牲者がいました。そのような人たちも、無差別に命を奪われたと考えると、とても辛くなりました。

二日目は、広島平和記念式典に参加しました。「周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないだろうか。」

これは、平和への誓いで、広島のが六年生が言った言葉です。

私達はまだ子供で、できることは少ないかもしれませんが。

しかし、平和について感心をもったり、多様性を認め、相手のことを理解しようとする 것도、平和への一歩です。

お互いを思いやる気持ちがあれば、戦争は起こらないのではないのでしょうか。

被爆者の中には、憎しみをこらえて生活している人もいます。と思います。それでも平和を想うのは、これからの未来に生きる私達に、あのときの悲劇を、二度とくり返してほしくないと思ったからではないでしょうか。

私は、そう願っている人たちのためにも、これからの世界に生きる人たちのためにも、八〇年前の事実がずっと語り継がれていくように、自分から行動していきます。

平和を願う

豊岡北小学校 織田 桜子

私が一番印象に残ったことやびっくりしたことは、二つあります。

一つ目は、原爆がおとされたあと黒い雨がふってきた時、その黒い雨を飲んだ人がいるということです。その時はびっくりしました。飲み物がほしいといっても、この体にわるそうな物をのむからです。その人たちは、「ダメ」「マズそう」「のみたくない。」と思わないで飲んだことにびっくりしました。

た。

二つ目は広島平和記念式典での、ことも代表の平和へのちかいです。私たちと同じ六年生なのにあんなすてきな文がかけていてすごいと思いました。特に一番印象に残ってるのが「ほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。」のところでした。たしかに一人一人が自分の思う道などにあゆみつづければ最後色々な人の役にたつかも知れないと私は考えます。ほかに大人だけではなく、私たちこどもでも平和をつくっていくことは、ぜんぜんできると思います。ほかにも知れてよかったのはなぜつるをおるのかを知れたことです。はじめは、千羽のつるを折るといいことが起こるから折っているとおもっていたけれど本当は、ちゃんとした佐々木さだ子さんのことなどでつるを折っているのがわかりました。これから長い人生をおくっていくので平和を第一に考えて毎日を楽しくすごせるにしたいと思います。

※この作文の無断転載を禁止します。

令和7年度 広島平和記念式典小中学生派遣事業感想文

令和7年9月発行

発行 磐 田 市

静岡県磐田市国府台3-1
磐田市総務部総務課 総務グループ
TEL 0538-37-4803